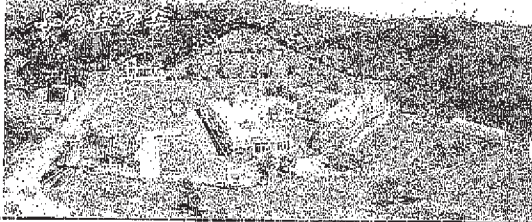


社会福祉法人 佑啓会



# 佑啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会

〒290-0265 市原市今富1110-1

☎0436-36-7611

発行者 里見 吉英

編集者 三股 金利

## 「施設」って何？

飯田 俊男

「主任、Yさんがなかなか寝てくれない。興奮して、大声で叫んでいて、自分の言う事なんか全く聞いてくれない。どうしたらいいんですか？」新人職員のリ氏は半ばノイローゼ状態。・・・この世界に入ったばかりの自分と同じである。

先輩職員に助けを求めると、「もう遅いから寝なさい」と一言だけで、今まで何だっただんだというように静かに床につくのである。何とも言えないくやしさがあつたがどうする事もできない。喧嘩の仲裁をしていると、「うんこ」と誰かが呼びにくる。行ってみると部屋の壁に便が塗りたくつてある。片付けをしていると今度はパニックを起こしてデイルームのガラスが割られる。ガラスは前回の泊まりの時に割られた。何で僕の泊まりの時だけ色々やるんだ。何か僕が悪い事をしたのか。何故割れば気がすむんだ。もういい加減にしてと胸倉を掴んでしまった事もあつた。騒ぎを聞きつけ、女性棟のベテラン職員が駆けつけ「職員のあるがと興奮してどうするの」と諭されるが、それが、理屈ではわかっていても、なんともやるせない。この仕事にはむかないと思いつつも辞めようと思つた。ただ口には出さなかった。一度でも口にしたら、どんな仕事に就いても逃げ出してしまふ気が

したからだ。それだけにこの新人職員の気持ちは痛く程よくわかる。それでも月日が解決してくれてた面もあり、いつしか「せんせえ」と慕ってくれる方が増え、話かけられるその表情は「人生いろいろあるんだ。元氣だぜ」と励ましてくれているようでありがたかつた。この人達との関わりは、先輩職員から教わるものではなく、自分でみつけていくものだという事を彼等から教わった気がする。

また、自分に子供ができて親の気持ちかわかった。子供は無条件にかわいい。自分の子供が職員から呼び捨てにされたり、いかに面倒くさいと見られるという言動には複雑な思いがあるだろうな、と率直に感じられるようになった。親の気持ちに込める意味でもこの人達は大切にしたいといけななと思えるようになった。しかしながら、私自身もまだ若い。親御さんや利用者者を無意識に傷つける事がないよう、謙虚な気持ちをつつまでも忘れないようにとは思っている。

就職した昭和六十一年頃は、こういつた施設は、保護・指導・訓練の要素が大きく、今のようないびきという言葉は一般的ではなかった。二階式の洗濯機に印をつけてダイヤル操作を解りやすくし洗濯の仕方を教えた。パンツは洗濯機で洗う事も教えた。自分の事は少しでも自分でできるように

と、生活面のあらゆる場面で同じような関わりをしていた。しかし結局できない人の方が多かった。可能性を信じている事と自分が教えている事に大きなギャップがあるのに気付くには、その時間はかからなかつた。しかし、その矛盾を口に出す勇気もなく、次の日も同じ事を教えていた。そんな頼りない学校でたての若者がいかに教えてやるという感じで利用者として接していたのだから、私が彼等を受け入れられなかつた以上に彼等も私を受け入れる事はできず、反発していたのは無理もない。

指導から援助へと処遇の考えかたも変わり、最近ではホテル並みの建物をアビールする所も出てきた。わすか十数年で随分と変わったなと思うと同時に「施設」って何なのだろうと改めて考えさせられる。

施設を利用する知的障害の彼等にとって、人としてどう生きるか、もつとも身近なモデルは職員となる。何度も挫折感を味わいながらも前向きに生きて行こうとする姿を新人職員のリ氏には、大変だろうが期待したい。

(指導主任)

## 「個性の強い兄」

五十嵐 修



佑啓をいつも興味深く拝見しております。先生方のいままでのご

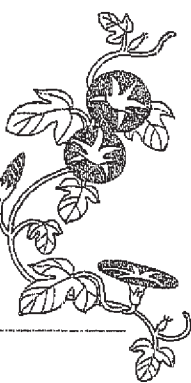
苦労した体験や考えを読んでおりまして、こんな素晴らしい先生方がいらつしやる所で世話になつていふ事に、弟としてとてもうれしく思つております。その中でも特に、兄弟姉妹の情が書かれた文章はとても勉強になりました。障害を持つた兄がいる私にとつて私と同じような立場にいる方がどういつた考えを持っているのだろうかという事が拝見できるからです。

実を言うと、私の兄が障害者であるという事を知っている私の友人は数人しかいません。それは、小・中・高校において、兄弟の話をする時に、私の兄は障害者であるという事が正直に言えなかつたからです。今思えばとても恥ずかしく、自分が情けなくなりますが、その頃は兄が障害者であるから私がバカにされたり、いじめられるのではと考えてしまひ、自分を守つてしまつたのかもしれない。私の兄は障害者であると書えるようになったのは、大学へ入学した頃からでした。ある福祉科目の講義を受けていた時の先生の言葉は今でも忘れられません。「障害は個性である」と。この言葉を聞いた時、目から鱗が落ちた気がしました。私達にも、おしやべりであるとかおとなしいといった個性があるように、障害だってその人の個性の一つではないかと考えられるようになりました。それ以来、私は正直に兄の事を話せるようになり、大学時代の友人は、皆私の兄の事を知っています。

それにもう一つ、その言葉が私の考えを変えた事があります。それは、障害者をもっている兄に対しては、そうと同じくしてやる事が本当の優しさではないという事です。障害者であるから何もできないだろうと思ひ、日常生活においてすべて手助けするというのは、優しさではなく、それはおせっかいであると思ひます。何もできないだろうと決めつける前に教える事が大切ではないかと思ひます。誰かが教えないと障害者の自立はいつまでもできないと思ひます。兄には、土・日曜の帰省時には母親が夕食時の仕度を教えて、材料の下ごしらえをとて上手にこなしています。教えてあげることにより、何ら私達と変わらない日常生活が送れる事ができると兄を見ていると分かつてきます。私は、これから兄と何十年と生活を共にしていく訳ですが、本当に困つていふ時には、手を差し伸べてあげ、あとは、温かく見守つてあげられる生活ができていたらと考えています。

最後に、私事でありますが、兄弟姉妹の皆様は、自分の将来やこれからの兄さんや弟さんや妹さんとの生活を共にしていく上でどういつた考えをお持ちなのかを今後とも佑啓を通して知る事ができればと思ひます。

(五十嵐 修・弟)



タ  
ブ

堀口 貴宏

何故、人権、倫理綱領という言葉を開くだけで、重荷の気分になってしまうのか。何故、堂々と胸を張っていられないのか。人権という問題に対する知識不足がそのような思いにさせるのか。成長過程において人権感覚という意識に乏しかった私が、まともな考え方に変わっているかどうかさえ疑問である。

始めての職場が学会で、ここでの仕事が一般的な施設の仕事である事に何の疑問も持たず働いてきた。ふと他施設の人から「ショートステイを多く受け入れていて大変でしょう、現場の職員から不満も多くでているのでは」と聞かれたことがある。しかし当然の様に受け止めていた私にとって、何か違和感のある言葉であった。他の施設は何をしているのだろうか、その程度にしか思えなかったことがある。人権についても似たようなことが言えるのかもしれない。会議や研修等を通して、あらゆる情報がある人々の時から周知されている職場で働く人にとっては、ごく普通の事なのかもしれない。だが何故、重荷の気分になってしまうのか。

無意識のうちに人権侵害が成されてないのか、また仕事に対する慣れというものが人権についての意識を喪失させているのではないのか。どこかこの事についてタブーにしていた感はない。

倫理綱領は普遍的なものである。行為の善悪を判断する基準として一般に承認されている、ごく当たり前のことを要約して列挙するのだから、他の所が作ったものと同じ内容になるはず。違っていたらおかしい。内容を読んでみても難しいことではなく、義務教育過程の中で教わった様なものである。だから、社会的常識のある職員ならば今更なせて感もしないでもない。しかしながら施設

設、特に知的障害のような福祉の中でも一般的に認知度が低い分野においては、世間との間に大きな溝がある。さらに閉鎖された社会、自分たちの意見を訴えづらい障害の特性等、そうした環境で働くうちに次第に一般的感覚からずれてしまうような部分は少なからずあるだろう。つまり、人権侵害がおきる一因として、そのような環境が大きく影響しているように思える。また理解していたとしても、日々の業務からくる疲れ等（それを言い訳にするのは甚だおかしいが）職員として未熟な面からくるゆとりが無さが引き起こす場合もあるかもしれない。そういう面から考えると、ふと立ち止まり、自分の行動を見つめ直すという意味において倫理綱領は必要なのかもしれない。

だが利用者への処遇マニュアルというものは必要なのである。それがいけなくて何がいいのかという、職員間で統一した具体的な基準を作成すべきか。しかし一方で人間相手の仕事にマニュアルなんてものはない、という思いもある。次元をどこにおくべきか。また本人の権利を主張していくと、個人対集団、プライバシー対安全・健康、保護者の意向対本人の考え等あらゆる面で衝突してくる。どこで折り合いをつけなければいけないのだろうか。

施設も小さな社会の一つである。社会という捉え方をすれば、様々な人間性をもった利用者・職員がいるのは当然のことだ。厳しい人、優しい人等、色々な役割をもつ人が接する状況は当然のことであるし、多様な人生観を持つ人達と接すること自体、彼等が生きていく上での財産になるのではないのか。保護しなければいけない面は多々ある。しかし、過剰すぎてもいけないように感じるのだが・・・

ミシエランの五つ星ではないが、星の数で評価が決まり、話題となり客がくる。そうした本が一年毎に発表されれば、評価が低い場合、無論客足が遠のき経営が苦しくなる。立て直すにはより客のニーズに沿った一層の努力が必要とされる。そ

ういう当り前のシステムが確立され、外部に対して透明性を持つことで、こうした問題はなくなるのかもしれない。社会に開かれ、自ずと競争原理が働くような構造が望ましいように思える。勿論、それによる弊害も出てくるとは思われるが。

(指導員)



研修会講演 柴田 麻子先生のお話を伺って

萩原 伸子

夫に代わり初めて参加させて頂いた研修会で、冒頭より柴田先生が「障害を持った子の親として、一主婦で、ここまでできました」とお話し下さいましたのは意外で、その経過に興味を湧かしました。

真摯にとつとつと語られる先生のお言葉からは、人生への姿勢そのものが伝わる様でした。ダウン症のお嬢様を出産なさった事も、今では人生のすばらしい出会いの第一番目と語られます。染色体異常と判られた時、「スーッと景色から色が消えた」そうです。気が取り直してすぐさま親戚中に話されたり、その積極的な人生への取り組みからも、人としての度量の大きさを感ぜられました。又、そこに留まらず、もう一人作って一緒に育てちゃえ!と、男児出産されたあたりも、底抜けな楽天性と前向きな強さを感ぜられました。親の立場から必要性を感じ、通所授産施設を設立され、福祉工場を作られたのも、そのままでの姿勢で歩んでこられた結果かと納得させられました。

伺っていて、ふと結婚後に夫の次男の知的障害が判明したおりの私自身の事を思い出しました。戸惑いながらも「この子にこれから何をしてあげられるかしら」と、前向きに受け止めていたのが、その時は不思議でした。それが、先生のお話より母性というものの大きな許容量とその成せる技だと気付きました。私達母親はその母性を発揮する事で想像以上の底力を持っていると、今回教えられました。

(萩原 裕久・母)

編集 後記

本場に梅雨なの?と疑問に思うような、真夏顔負けの日差しと暑さが何日も続き、すっかり夏気分だった私。案の定、戻ってきた梅雨の寒さに体調を崩し、やはり健康第一であるなど反省しきりです。

学会に来て早三ヶ月。様々な刺激を受けつつ、次々任される仕事を必死にこなす毎日ですが、一日が終わってみるとやり終えた仕事はごくわずか。一日がものすごく短く感じられるのは私だけでしょうか?

そういえば、今月のはかの有名な「予言」の月。でも元氣一杯の衆生さんの様子を見てみると、世の中の暗い話題も別世界の出来事のように思えるから不思議なものです。

冷たい雨に紛れて「魔王」が降ってこないことを祈りつつ...

佐啓三十四号をお届けします。

八賀 まゆみ